AMDAからの提言

菅波　茂

はじめに……

AMDAは、地方に本部を置く国連NGOの立場から、「国際貢献と地域おこし」に必要なポイントを説明します。すなわち、海外で行う国際貢献と私たちの生活に関係のある地域おこしは、あまり関係がないと考えがちです。しかし、私自身が過去二五年間国際協力に関わった経験では、「国際貢献と地域おこし」の関係は、コインの裏表のように密接な関係であるという結論にいたりました。このことについて、次の五つのポイントから説明します。

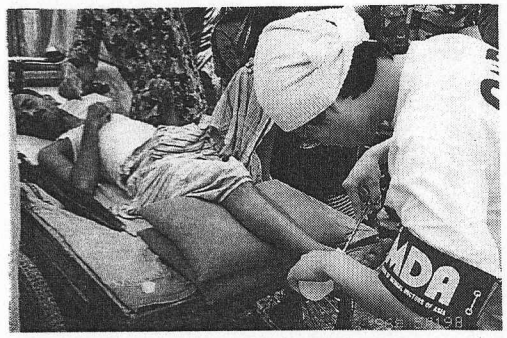
① 世界の共通価値
② 人道援助の三原則

③ 違いは財産
④ エネルギーの地下水脈
⑤ 天職

一、世界の共通価値……

最初に「世界の共通価値」について説明します。世界のどこに行っても、世界の誰でもが同じように大切にしている価値があります。それは「今日の家族の生活と明日の家族の希望」です。これは日本でもアメリカでもアフリカの国々でも同じです。それを実現できる状況のことを「平和」といいます。平和とは、ただ戦争がない状態ではありません。「今日の家族の生活と明日の家族の希望」を妨げる要因が三つあります。それは戦争、災害と貧困です。戦争などの紛争は「難民」を生み、災害は被災者を出し、貧困は餓死者などを出します。いずれの状態においても、「今日の家族の生活と明日の家族の希望」が打ち砕かれています。このような状況の人達に行われる究極の親切のことを人道援助と言います。

AMDAは戦争、災害と貧困に対して世界の仲間と一緒に解決に向かって努力しています。原則は簡単です。「困ったときはお互い様」という「相互扶助思



バングラデシュ竜巻緊急救援
治療にあたるAMDAの医師（Dr. 廣間）

想」です。相互扶助思想は、下記の五点において人道援助の基本コンセプトとして最適です。

① 阪神淡路大震災で証明されたように日本人の行動規範です。

② 人道援助の対象国であるアジア、アフリカそして中南米は相互扶助を基盤とした血縁共同体社会です。

③ 相互扶助思想は、援助を受ける側にもプライドを満たします。

④ 相互扶助思想は「生活の救済」の思想で、決して「魂の救済」の思想ではありません。

⑤ 相互扶助は「知っている知っていない」という人間関係が第一義です。従って、知らない人には冷たいという欠陥があるので「世界中皆お友達」になることが大前提となります。

なお、ＡＭＤＡは人道援助活動によって得られる相互信頼により国境、人種、民族、宗教、文化、年齢等々を超えた「多様性の共存」を推進して「市民からの戦争の抑止力」強化を試みています。国連認定ＮＧＯとして国連経済社会理事会への「市民からの戦争の抑止力」に関する政策提言をめざしています。

いずれにしても、世界中の人が「今日の家族の生活と明日の家族の希望」を願っていることを知ることにより「国際貢献と地域おこし」が同じ価値判断に基づいていることを理解できます。

二、人道援助の三原則……

二番目の「人道援助の三原則」について説明します。ＡＭＤＡは、人道援助を実施するに当たっての原則を相手にはっきりと伝えます。多種多様の立場と考え方のある国際社会で、説明のない親切は相手に警戒心と不安をいだかせます。すべての親切を含む行動に説明がいります。ＡＭＤＡの「人道援助の三原則」の説明です。

① 誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。

② この気持ちの前に国境、民族、宗教、文化等の壁はない。

③ 援助を受ける側にもプライドがある。

まず「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。」および「この気持ちの前に国境、民族、宗教、文化等の壁はない」ということについて説明します。私たち日本人にとって貴重な体験は、阪神淡路大震災におけるボランティア活動です。「日本中が何かをしたいと思った」この気持ちのことです。同時に、海外からも多くの支援および支援申し込みがありました。太平洋戦争敗戦後の復興に世界各国からの支援を受けた事実があります。しかし地震前までの日本は、この事実を忘れ、豊かな経済大国としての義務から世界各国へ援助活動を実施していました。ところが、日本の援助活動を受けていた豊かでない国々からも明確な人道援助の申し出がありました。メディアは世界からの支援の動きを報道しました。朝日新聞は、アフリカのウガンダの孤児の動きを伝えました。「ウガンダではエイズの感染率が三〇％もあり、若い人達の死亡率が高くエイズ孤児が多い。日本人の援助によって運営されている孤児院の子ども達が、バナナを売った一〇円単位の売り上げを被災した日本へ寄付したい」という内容でした。毎日新聞は、「タイのスラムで活躍しているスラムの天使プラチープさんが貴重な義援金を持って神戸を訪れて被災者を励ました」という内容でした。外務省の資料によれば世界百数カ国から支援の申し込みがありました。経済危機のいわれているキューバからの医療チームの派遣申し込み。世界で唯一日本と国交のない北朝鮮（朝鮮民主主義共和国）からの国際赤十字社を通しての義援金の寄付、等々。人道援助は経済大国に課せられた義務ではないという現実は大切です。

次に「援助を受ける側にもプライドがある。」ことを説明します。一九九〇年夏。ミャンマーから二〇万人を越えるイスラム系ロヒンギャ難民がバングラデシュに流入しました。政治的内紛が原因でした。一九九一年一月頃よりＡＭＤＡは、医療チームを派遣する準備を開始しました。難民キャンプではすでに国連難民高等弁務官と欧米のＮＧＯ

ミャンマー地域保健巡回診療をするとともに給食プロジェクトを行う
AMDAでは栄養失調児に昼、夕食を週２回行っている。

が救援活動を実施していました。難民キャンプで医療活動をするためには国連難民高等弁務官現地事務所の許可が必要でした。しかし、現地から聞こえてくるのは「日本の医療ＮＧＯはもういらない」の大合唱で、待てど暮らせど国連難民高等弁務官からの許可は来ませんでした。

一九九一年三月。もうこれ以上待てない。ＡＭＤＡは医療チームをバングラデシュ入りさせました。不思議なことに普通三カ月かかる外国ＮＧＯの活動許可が三日間でおりました。バングラデシュ政府だけでなくマスコミも熱烈歓迎の論調を紙面に踊らせました。理由は簡単でした。日本からのＡＭＤＡ医療チームの団長が東京大学医学部外科に留学中のＳ・Ａ・ナイーム医師だったからです。その後、バングラデシュ政府より現地州政府のロヒンギャ難民対策委員会を通して国連難民高等弁務官現地事務所を紹介され、ＡＭＤＡの難民キャンプでの医療活動がようやく決定しました。

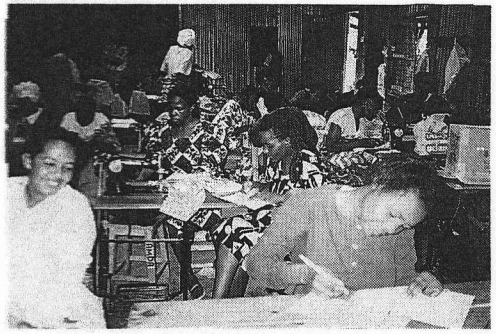
難民キャンプ数は一三カ所。難民二六万人中九万人は雨露を避ける家はなく、木の葉やビニールで覆っただけの小屋に住んでいました。井戸やトイレも不充分でした。死因は栄養失調、下痢、心疾患、痙攣、肺炎、老衰などでした。まだコレラは流行していなかったが雨季が本格化すれば相当数の死者が出る可能性がありました。ＡＭＤＡは次の三つの活動を開始しました。①診療活動。②寄生虫駆除活動。③保健衛生教育。衛生教育を寄生虫駆除活動の前に実施しました。衛生知識の乏しい難民に「トイレに行くときはサンダルをはこう」「トイレの後は手を洗おう」「川や池の水をそのまま飲まないように」を教えました。字の読めない人達にはポスターを使いました。このような簡単なこと

でも疾病予防に大きな役割を果たしました。バングラデシュ政府も難民キャンプ毎に医療チームを派遣していました。最初から彼等と組んでいれば、難民救援医療活動をもっと素早く実施できた可能性がありました。どの国も喜んで外国からの救援チームを受け入れているわけではありません。自国の医師の活動を望んでいるのです。私たちは学びました。即ち、「援助を受ける側にもプライドがある」と。

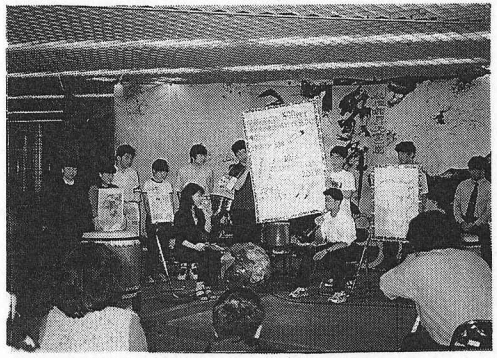
人道援助の三原則は、他人に対する親切をどこで実行するときにも適用できます。「国際貢献と地域おこし」の場は違っても人間関係に変わりはないということです。

三番目の「違いは財産」について説明します。「ＡＭＤＡアジア多国籍医師団」を事例として説明します。

現在の国際社会の課題は「多様性の共存」です。なぜなら緊急救援活動を要する難民発生などは、多様性の共存が破綻したときに起こります。多様性が有する異質性は時として差別や紛争の原因となりやすいのです。「多様性の共存」は共通の目標に向かって共に努力する時のみ可能となります。具体的に述べます。「アジア多国籍医師団」は「人権思想」と「相互扶助思想」を共に備えたコンセプトを持っています。緊急救援事態発生時にＡＭＤＡ加盟国の医師によって編成され派遣されます。現在はソマリア難民、旧ユーゴスラビア被災民、モザンビーク難民そしてルワンダ難民などの救援医療活動を展開しています。「アジア多国籍医師団」参加メンバーの背景には多言語、多宗教そして多文化があります。多様性も極まります。しかし多様性の異質性より人道援助活動に必要な医師としての職業的倫理観がすべてに優先しており、参加医師



女性自立支援
アフリカ・アジアの貧困層の母親達を対象として、自立を助けるためにミシントレーニング等、職業訓練と少額貸付を行っている。



AMDA高校生会の活動
AMDAのプロジェクトの支援を訴える募金活動。
高校生会は、中国学校再建、ネパール子ども病院等、建設を訴えた。

の背景にある医療状況や文化が医療チームとしての能力と効果を上げています。例えば、自然災害発生時の状況及び難民キャンプ内で必要な医療はＡＭＤＡの参加国で通常経験できることだからです。バングラデシュではコレラなどの下痢性疾患で多くの犠牲者がでているのでＷＨＯ指定の国立下痢センターがあるほどです。ネパールでは過疎地区における保健医療対策として地域住民に対する保健衛生教育は盛んです。日本ではこれらのプライマリケアーより高度医療が普及しており、彼らは高度医療を日本から学ぶことが多いのです。いずれの医療技術も緊急医療活動に必要です。そして更に大切なことはＡＭＤＡはすべての宗教を含んでいることです。インドネシア、バングラデシュ及びパキスタンのイスラム教、インドやネパールのヒンズー教、タイやカンボジアの仏教、韓国や台湾の儒教、フィリピンのキリスト教そして日本の神道です。いわゆる世の中の社会構造はしばしば家族構成と宗教によって規定されます。例えば、ミャンマー難民であったロヒンギャーやソマリア難民はイスラム教でありルワンダ難民はキリスト教です。彼らの生活における宗教的要因は大きいものがあります。しかし、多くのＮＧＯは多宗教でありません。特に欧米のＮＧＯはキリスト教を背景にしているのでイスラム教社会ではその活動に制限があります。ＡＭＤＡは多宗教構成であるため超宗教といえます。したがってＡＭＤＡに宗教的タブーはありません。「アジア多国籍医師団」に参加した医師は医療活動を実施する過程において自分にない価値をお互いに認めあうことにより「尊敬と信頼」を持つようになります。そして「他人の役に立ちたい気持ちの前にも国境、民族、宗教、文化等の壁はない」という事実を理解すると共に、逆に「違いは財産」という価値

判断を共有するようになります。

「国際貢献と地域おこし」で直接的な目標と方法論は違っていても尊敬と信頼のない人間関係では目標達成は困難であるということです。

四、エネルギーの地下水脈……

四番目の「エネルギーの地下水脈」について説明します。人道援助の三原則の中の「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」という原則で一番大切なことは各自の動機と持続性です。これはきわめて個人的な範疇に属しますが、地域ぐるみで実施するときは伝統として環境と歴史の中で醸造された地域の精神文化が大きな役割を果たします。何をする時に地域のエネルギーが爆発し持続するかということです。具体例を岡山県について説明します。岡山県のスローガンは「燃えよ！岡山」です。即ち、岡山県人はあまり燃えないということなのです。しかし、「燃えない岡山が燃えた日」があります。戦後五〇年間で初めて燃えた日でした。それは阪神淡路大震災の時の県民あげての救援活動でした。これは神戸新聞も「群を抜いた救援活動」であったと感謝しています。県庁、地方自治体、企業、労組、大学、宗教団体、民間団体、地域コミュニティ各種団体等々です。関係者は当たり前のこととして受け止めており、他県と比べて特別な活動をしたとは思っていません。私は岡山県人の意識と行動にものすごいギャップを感じました。このギャップこそ岡山県の財産と思っています。岡山県人は「医療、教育そして宗教に対する高い感受性」を持っており、この感受性は人道援助の精神に類似しています。即ち、岡山県の精神文化は「弱者の存亡」に共鳴する人道援助の精神文化だと定義することができます。この精神文化こそ「エネルギーの地下水脈」です。精神文化に基づく行

動は爆発的で持続的です。地域ぐるみの活動が爆発的で持続的であることを望むときは、地域の「エネルギーの地下水脈」である精神文化を模索する必要があります。ＡＭＤＡはこの岡山県の「エネルギーの地下水脈」である精神文化を基盤にした「人道援助の世界都市」を提言しています。それは「西のジュネーブ、東の岡山」のスローガンに集約されます。すなわち、人道援助関係の国連機関の集積しているジュネーブに対して人道援助関係の民間団体を岡山に集積し、国連ＮＧＯであるＡＭＤＡを仲介として岡山とジュネーブが協力しあって世界の人道援助に貢献するとともに岡山の地域おこしにも寄与しようという発想です。

「国際貢献と地域おこし」の具体的な目標は各地の「エネルギーの地下水脈」である精神文化を考察するところから始まります。

五、天職……

五番目の天職について説明します。

「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。」そして「この気持ちの前に国境、民族、宗教、文化等の壁はない」ということも事実です。しかし、どのような形で他人の役に立てるのかについては多種多様です。一番無理のない方法が自分の職業を通して社会貢献することです。これを天職といいます。例えば少子高齢化社会では身体的ハンディをもった高齢者の方々を地域ぐるみでお世話をしていく傾向にあります。地域には高齢者のお世話に必要な職と人はそろっていますが、ちょっとした設備、人件費などの必要な経費を金額に換算すれば百万円、千万円単位になる可能性もあります。すべてビジネス的に実施しようとすると資金的な問題で実施不可能となります。地域の人達が、高い公

共性、社会性そして地域性があり、必要なことに対して自分の職業を通して「損をしない範囲で社会貢献」することにより実現可能なことはたくさんあります。「天職」は古くて新しいコンセプトです。「国際貢献と地域おこし」に関与する人達の意欲に加えて自分の自信のある職業を通しての社会貢献が一番現実的であるということです。

六、ボランティアについて……

最後にボランティアについて説明します。人道援助の三原則の「援助を受ける側にもプライドがある」のプライドとは何でしょうか。それは「自分も社会から必要とされている」という実感のことです。これは「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」の裏返しです。「情けは人のためならず」という有名な格言があります。「ボランティアは人のためならず。自分も社会から必要とされている実感を得る方法である」との認識を持ってこそ「さわやかなボランティア活動」が期待できます。

[参考文献]

・菅波　茂『遥かなる夢』アジア医師連絡協議会、一九九三年。
・菅波　茂『とび出せ！ＡＭＤＡ』厚生科学研究所、一九九五年。
・菅波　茂『ＡＭＤＡの提言』山陽新聞社、一九九六年。

●プロフィール

菅波　茂（すがなみ　しげる）

・広島県生まれ。一九七七年岡山大学医学部大学院（公衆衛生）修了後、心臓病センター榊原病院勤務などをへて、一九八一年菅波内科医院開業。一九八四年ＡＭＤＡ（アジア医師連絡協議会）設立。老人保健施設「すこやか苑」（九〇年）、「あすか在宅介護支援センター」（九二年）、「アスカ訪問看護ステーション」（九三年）を開設。

・国連ＮＧＯ ＡＭＤＡ代表理事。医療法人アスカ会理事長。

・共著書に、『遥かなる夢　国際医療貢献と地域おこし』（ＡＭＤＡ）、『とび出せ！　ＡＭＤＡ』（厚生科学研究所）、『ＡＭＤＡの提言』（山陽新聞社）、『はばたけ！　ＮＧＯ／ＮＰＯ』（中国新聞社）ほか。

○http://www.amda.or.jp/index.html

あとがき

よんどころなく起こった平成飢饉にさいして緊急輸入された外米のまずさに文句を言ったり、いじめによる自殺事件が起こったり、本当におかしな世の中になってきたなと感じさせられているときに阪神淡路大震災が起きてしまいました。地震の恐怖と興奮が明けやらぬときに、今井賢一さんの論壇が眼に止まりました。今井さんは、「日本人ゆで蛙論」を展開する中で、次のように述べていました。

政治も官僚も大きく動けない。とすれば、われわれ一人ひとりが外界の熱を感知して動き、まわりをゆすって「ゆらぎ」を作り、その動きの連鎖のなかから、芋づる式に全体の動きをつくってゆくしかない。最近の科学論でいう「自己組織化」である。ポイントは、「自己」を変えつつ、他と連動して社会を動かしていくことである。が、頼るべき哲学なしでは漂流する。ここは、いったん基本に戻って、そこから動き出すことである。

では、「基本」とはなにか。環境の変化にリアルタイムに対応して「生きる」ことである。当たり前のことである。……

（朝日新聞一九九五年四月一五日論壇）

もちろん「頼るべき哲学」は今でも生まれてこないのですが、「基本に戻って、そこから動き出すこと」をまず始めないといけないかなと思っていた矢先、学内においてボランティア論に出くわすことになってしまいました。私自身は自然科学研究者ですから、ボランティア論などというものは当然、人文科学や社会科学分野の方が担当されるであろうと思いこんでいたのですが……。